

世界遺産への道 28 《沖ノ島や古墳の価値を再認識／平成 22 年度の活動を振り返る》

2011 年 04 月 15 日

市では、福岡県や福津市と協力しながら、学術研究、啓発活動の両面から世界遺産へ向けた活動を進めています。今回は、平成 22 年度の活動を振り返ります。

専門家会議

本遺産の世界遺産としての価値の本質はどこにあるのか。これが、世界遺産登録に向けての最大の課題です。平成 22 年度は、専門家会議で、段階的に学術議論を深めました。

▽第 3 回専門家会議（平成 22 年 6 月）

会議では、沖ノ島と祭祀（さいし）遺跡の価値について議論しました。

沖ノ島は 1954（昭和 29）年から 1971（昭和 46）年にかけて、3 次にわたる調査が実施され、報告書がまとめられています。

しかし、遺跡や奉獻品など、現在の学術水準で科学的調査などを実施し、改めて検証すべきなのではないかとの意見が出されました。

▽第 2 回国際専門家会議（平成 22 年 10 月）

会議では、沖ノ島と宗像大社（史跡名称は宗像神社境内）について検討がされました。

議論に先立って、みあれ祭や神奈備（かんなび）祭など、現在も伝わる信仰の形を視察しました。また、沖ノ島祭祀遺跡を視察。国内外の専門家のみなさんが非常に高い関心を示すなど、世界遺産としての評価も一定の感触を得ることができました。

一方で、沖ノ島の港周辺のテトラポットやコンクリートの堤防、モルタルで固めた崖面などに違和感を感じたとの意見があり、景観については今後の課題となりました。



沖ノ島の祭祀遺跡を視察する専門家ら

▽第 4 回専門家会議（平成 23 年 2 月）

東京を会場に、宗像本土側にある古墳について議論。沖ノ島といかに関連付けるかで構成資産となりうるのかを探りました。

ヤマト王権が主宰した沖ノ島での国家的な祭祀を現地で統括したのが、地元玄界灘を掌握した豪族・胸形（宗像）氏です。その胸形氏の存在を証明するものが古墳です。

これまでの専門家会議の議論では、「古墳はあくまでも沖ノ島祭祀遺跡の補完的存在で、世界遺産としての価値は低い」との意見が大勢を占めていました。しかし、今回の議論では、「沖ノ島祭祀を支えた人の存在は重要ではないか」との意見が出され、古墳の価値を再認識することができました。

個々の古墳は今後の議論となりますが、沖ノ島祭祀と古墳の関係をさらに追究していくこととなります。

専門家会議では、沖ノ島、宗像神社境内、古墳の 3 つの観点から段階的に本遺産の価値を見出すことで、各構成資産の価値や関連性を深く議論することができました。

しかし、まだその全てが世界遺産としての価値があると評価されているわけではありません。本年度は、世界遺産としての価値をさらに掘り下げながら、資産を絞り込んでいきます。



熱い議論がくりひろげられた専門家会議の様子

学術面他

▽自然も貴重な遺産

福岡県レッドデータブック改訂版の作成に伴う絶滅危惧種の調査が昨年6月に実施されました。動植物などの自然も、守るべき貴重な遺産であると改めて感じています。

▽大島御嶽山遺跡の発見

大島御嶽山（みたけさん）の山頂で、遺跡が発見されました。この「大島御嶽山遺跡」からは、奈良三彩や滑石製品など、沖ノ島の露天祭祀と共通する遺物が多数発見されました。

この発見で、8世紀から9世紀にかけての露天祭祀は、沖ノ島、本土の高宮祭場（田島）、御嶽山（大島）の3カ所で行われていたこととなります。

今後は、構成資産として加える価値があるか、専門家会議で議論していきます。

応援大使

世界遺産推進会議では、世界遺産応援大使を設置しました。昨年10月には、記念すべき第1号として母親が宗像出身で歌手の森口博子さんを任命しました。

また、2月には、宗像出身の俳優で、NHKドラマ「坂の上の雲」で広瀬中佐役を熱演した藤本隆宏さんを応援大使に任命しました。

二人には今後、力強い助っ人として本遺産のPRに力を貸してもらいます。



握手をする谷井博美市長と応援大使の森口博子さん（左）

市民組織

▽宗像・沖ノ島世界遺産市民の会

市民組織「宗像・沖ノ島世界遺産市民の会」が昨年9月26日に発足しました。この会は、各地区のコミュニティ運営協議会や市内23の各種団体が結集して組織されたものです。

設立記念講演会では、専門家会議の委員長でもある西谷正さんが、沖ノ島の魅力をわかりやすく解説するとともに、市民の盛り上がりの大切さを語りました。

▽市民参加型ミュージカル

昨年11月に開かれた市商工会青年部主催の友遊フェスタで、市民参加型ミュージカル「むなかた三女神記」を上演しました。今後も、世界遺産登録活動のサポートとともに宗像のまちづくり、人づくりを進めていきます。

世界遺産登録活動は、行政と市民が一体となってこそ価値があるものになるはずです。

啓発・PR活動

▽遺産と市の魅力を発信

アクロス福岡や北九州空港でのパネル展示、東京での九州観光物産フェアなどで、多くの人々に本遺産をPRしました。

また、市商工会のみなさんには、東京での商品展示会の中で本遺産をPRしてもらいました。

しかし、知名度はまだまだです。東京では「宗像＝むなかた」と読んでもらえないことも多く、本遺産と共に市の魅力も発信していく必要性を痛感しました。

▽大島を題材に研究発表

北九州市立鴨生田小学校では、大島を題材とした研究発表を実施しました。その中で、大島の歴史や観光の他、沖ノ島や世界遺産登録活動について児童たちが一生懸命勉強しました。

児童たちは、世界遺産を目指していることを知って、大いに宗像に興味を持ってくれたようでした。



大島について学ぶ鴨生田小の児童たち

▽新パンフレットを作成

通常版に加え、英語版、中国語版、ハングル版と子ども版を作成しました。

子ども版は、市内の小学5年生以上に配布しています。パンフレットは世界遺産登録推進室に設置していますので、見てください。

バス見学会

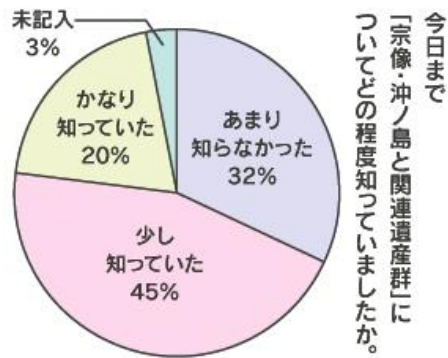
昨年度に引き続き、構成資産を巡るバス見学会を開催しました。

世界遺産サポーターやルックルック講座、赤間西、東郷、神湊地区のコミュニティ・センターでの講座など合計14回のバス見学会を開催。参加者は延べ246人で、179人のみなさんにアンケートに回答してもらいました。集計結果は次のとおりです。

●参加者の主な感想

▽ビデオを見た後に現地を見学したのでわかりやすかった。このようなイベントがあれば、また参加したい

▽世界遺産に登録されるメリットがあるのか疑問に思っていたが、少し理解できたような気がする



年 齢	人 数
40 歳未満	1
40 歳代	2
50 歳代	18
60 歳代	74
70 歳代	68
80 歳以上	16
合計	179

また昨年度は、新たに大島でのバス見学会を開催しました。宗像歴史観光ボランティアの会と世界遺産サポーターを対象に合計5回開催（参加者95人）。参加者の多くは、初めての大島訪問でしたが、参加者からは別の季節に再訪したいとの声が多く聞かれました。

また、遥拝所から沖ノ島を見た参加者からは、感嘆の声が聞かれました。

バス見学会は随時、ルックルック講座で募集しています。内容や時間などは相談に応じます。気軽に世界遺産登録推進室へ問い合わせてください。



大島の中津宮で説明を聞く参加者たち

世界遺産サポーター

世界遺産サポーターは現在、350人を突破。バス見学会の案内や各種情報提供などを実施しています。また、イベント時にはボランティアスタッフとして参加協力しています。

本年度からは「宗像・沖ノ島世界遺産市民の会」と連携し、このサポーター活動をさらに盛り上げていきます。市内外を問わず募集していますので、ぜひこの機会に登録してください。

国際シンポジウム

東京の日経ホールで2月11日、国際シンポジウムを開催しました。当日の関東地方は、珍しく大雪となったにもかかわらず約300人の来場者がありました。

基調講演では、九州大学名誉教授の西谷正さん、國学院大学教授の梶山林継（すぎやま・しげつぐ）さん、韓国からは、大韓民国国立中央博物館企画研究部長の兪炳夏（ユ・ビョンハ）さんが登壇しました。

沖ノ島祭祀遺跡の変遷

西谷さんは、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」について、全体的なストーリーを説明しました。

沖ノ島で祭祀が始まる以前の状況について、沖ノ島での正三位社前遺跡、大島のロクドン遺跡、田熊石畑遺跡を取り上げて説明。また、4世紀から始まる沖ノ島での4段階に変遷する祭祀遺跡について順を追って解説しました。

岩上祭祀遺跡は東郷高塚古墳との、岩陰祭祀遺跡は津屋崎古墳群との関連性を説明。また、朝鮮半島との関係を示す金製指輪や中東由来と考えられるカットグラスわん、中国敦煌壁画にも描かれている金銅製龍頭、唐三彩などを取り上げ、非常に国際性の高い遺産であることを強調しました。

沖ノ島での露天祭祀以降は、大島で確認された大島御嶽山遺跡や田島の高宮祭場の露天祭祀から、それぞれ沖津宮・中津宮・辺津宮が成立し、その後、今のような社殿祭祀へと移ることを説明。信仰については、世界遺産になっている広島県の厳島神社や神奈川県ของ江ノ島で宗像三女神が祭られていったことに触れ、その広がりについて説明しました。

また、宗像でも、みあれ祭や神奈備祭、沖津宮現地大祭などで信仰が引き継がれ、沖ノ島に伝わる禁忌（きんき）なども残っていることなどを説明しました。



本遺産について説明する西谷さん

祭祀開始は3世紀末？

梶山さんは、沖ノ島祭祀遺跡の研究に携わり、神道考古学の観点から講演しました。

今回の講演で特に注目されたのは、沖ノ島祭祀の開始時期です。梶山さんは、沖ノ島17号岩上祭祀遺跡から出土している21面の鏡が、奈良県天理市の黒塚古墳から出土した33面もの三角縁神獸鏡のあり方に近いことなどから、3世紀末に祭祀が始まったのではないかと提言しました。

これまでの通説では、鏡が製作されて100年以上経過した伝製品（使い伝えられたもの）を持ち込み、4世紀後半から始まったとされてきました。

沖ノ島での祭祀の始まりを古くする理由として、祭祀遺跡から出土した鏡に、手擦れによる風化などが認められないことを挙げました。この話題は翌日の専門家会議でも取り上げられましたが、現時点では証拠が不十分であり、今後の検討課題となりました。



神道考古学について講演する梶山さん

韓国の航海祭祀遺跡

兪さんは、木舟での航海の困難さと実際の航海ルートについて発表。韓国を代表する航海祭祀遺跡・竹幕洞（ちゅんまくどん）祭祀遺跡を紹介した後、韓国でも近年の調査で知られるようになった祭祀遺跡の最新情報を報告しました。

まず、エンジンなどがない時代にどうやって海を渡ったのかを考察。風のみでは無理なので、艫（ろ）を使った人力による動力で、島伝いに航海していたと考えられます。夜の航海は危険で、昼間が主な活動時間と考えられ、目視できる島に向かってこいでいたと推測しています。

航海のルートは、三国史記によると3世紀には中国大陸沿岸から渤海（ぼっかい）湾、遼東（りゃおとん）半島沿岸、朝鮮半島南西海岸、対馬海峡、日本海を結ぶコースであったと推測。船の性能が良くなるにつれて、航海ルートも次々に開発されていきます。

韓国で古代の航海祭祀遺跡として代表される竹幕洞遺跡は、辺山（びよんさん）半島で最も突出した海岸に位置し、周辺の近海を眺望できる絶好の場所に位置しています。祭祀は3世紀から始まり、5～6世紀が最も盛んに開かれていたようで、朝鮮時代末期頃まで続いていたようです。

祭祀の出土品の中には、中国製の青磁や日本製石製品が含まれ、大甕（おおがめ）に馬具や武器などを納めるという加耶地域での方式も確認されています。このことから、中国王朝、百濟（韓国西側）、加耶（韓国南部）、倭（日本）という国際的連携の下で相互に往来した船舶などが立ち寄り、遠距離航海に備えて、安全を祈願したと推測されています。

また、近年の調査では、済州（ちえじゅ）島龍潭洞（よんだんどん）遺跡や、莞（わん）島清海鎮（ちよんへじん）遺跡、蔚陵（うるるん）島玄圃里（ひよんぼり）遺跡からも航海に伴う祭祀遺跡であることが確認されています。



韓国の祭祀遺跡の情報を話す兪さん

大島御嶽山遺跡を報告

基調講演の後、3人の講演者に日本イコモス本部執行委員の岡田保良さんを加え、九州国立博物館館長の三輪嘉六（かろく）さんの進行で、パネルディスカッションが開かれました。

この中で、西谷さんが、昨年発見され調査が実施された大島御嶽山遺跡の重要性について報告しました。



パネルディスカッションの様子

世界遺産としての価値を総合的に捉えた今回のシンポジウムは、まだまだ知名度の低い「宗像・沖ノ島と関連遺産群」と宗像市を、関東圏内で啓発する上で、たいへん意義深いものとなりました。

世界遺産への道 29 《沖ノ島と神島の比較》

2011年05月15日

みなさん、神島を知っていますか。三重県鳥羽市と愛知県渥美半島の中ほどにある丸い島で、現在500人ほどの島民が生活しています。この島も沖ノ島と同様、古代に航海の祭祀（さいし）が実施されていたといわれる島です。今回は、神島を視察した時のことを紹介します。

視察は3月23日に実施。この日は、北風が強く吹いていました。鳥羽の佐田浜港から出航し、約40分かけて島に向いました。島に近づくにつれて波はうねりに変わり、玄界灘をしのぐ荒れた海となっていました。地理的には、伊勢湾と太平洋の境に位置し、古代でも伊勢から東国に向かう航海上の難所だったことがわかります。

島内は、昔ながらの集落景観が保たれ、民家と民家の間の細い路地を登って集落にある八代神社に向かいました。この神社には、島から出土したといわれる神宝が蔵に奉納されています。写真撮影は禁止されていましたが、現物を直に見ることができました。



神島の街並み

神宝の時代は、頭椎大刀（かぶつちのたち）や画文帯神獸鏡（がもんたいしんじゅうきょう）など、一部に古墳時代の資料が含まれていました。しかし、60面以上の鏡（唐式鏡、和鏡）や機織具の部品、三彩小壺、青白磁合子などその多くは、沖ノ島で言えば露天祭祀から祭祀終息以降、つまり奈良時代から、宗像大社（神社）で御長手神事（みながてしんじ）が実施されていた室町時代のものでした。

これらの神宝は、島の北東側にある崖下の砂浜から出土したという文献もありますが、詳細はよくわかりません。実際に出土地点近くまで行きましたが、知多半島も望める場所で、険しい崖が続き、当時はおそらく足場の悪い場所であったと考えられます。



神宝が見つかった場所

沖ノ島には、祭祀をした場所や出土状況、祭祀行為の変遷などがほぼ完全に残っていますが、神島は出土状況が定かではありません。今回の視察で、難破船からの持ち込みではないかとも考えましたが、広く祭祀品として知られているものばかりということで、今後は専門家による比較研究を実施していきます。

世界遺産への道30 《沖ノ島と伊勢神宮の比較》

2011年06月15日

伊勢神宮は、日本を代表する神社というイメージを持つ人もいます。文化庁では、伊勢神宮を世界遺産にしようと考えていた時期もありました。史跡として価値があるのか、それとも式年遷宮の行事、つまり無形として価値があるのかを議論しました。

式年遷宮は20年に一度開かれる全国的にも有名な行事で、平成25年には62回目の式年遷宮が開かれる予定です。昭和48年の第60回式年遷宮で廃材となった神明造りの社殿は現在、宗像大社の辺津宮奥にある第二宮・第三宮として建てられ祭られています。



式年遷宮が開かれる伊勢神宮の敷地

神様は、新しい所、新しい物を好むとされています。つまり、20年に一度新しい住まいに引っ越し、新しい神宝を授けるのです。この考え方は、沖ノ島の祭祀（さいし）も同様で、一度奉獻された神宝は二度と使われることなく、積もりに積もって約8万点の神宝が現在に伝わったものと考えられます。

伊勢神宮内宮から少し離れた場所に、徴古館（ちょうこかん）という伊勢神宮の伝記や神宝を納めた施設があります。神宝の中には、沖ノ島の神宝とよく比較される琴や機織具の他に、三種の神器（鏡、剣、玉）をはじめとする鉄鍬（てつぞく）、盾、さしば、コロク、ユギなどが展示され、古墳時代の古墳の副葬品や装飾古墳に描かれるものと同等の品が多いことに驚かされます。伊勢神宮の神宝からは、古代沖ノ島の神宝などが現在に受け継がれていることが実感でき、伊勢神宮の祭祀の原点が、宗像大社沖ノ島にあるのではないかと思わせるものでした。

また、伊勢神宮の周辺の土産屋が並ぶ通りは、江戸時代のお伊勢参りのにぎわいをほうふつとさせる伝統的建造物群として整備され、景観に配慮した街なみが現在も続いていました。



伝統的な建造物（銀行や郵便局など）が並ぶ伊勢神宮周辺の街なみ

世界遺産への道3 1 《登録活動を盛り上げる市民参加型ミュージカル》

2011年07月15日

沖ノ島と関連遺産群の世界遺産登録活動を盛り上げようと、今年も「宗像・沖ノ島世界遺産市民の会」が主催する市民参加型ミュージカル「むなかた三女神記」が上演されます。

5月に開かれたオーディションには市内外から46人が参加。配役も決定し、本番へ向けて毎週土曜日と日曜日、練習に励んでいます。

昨年に引き続き参加する堀美優（みゆう）さん（福津市・小学5年）は「今年も楽しみにしています。昨年とは演じる役も変わりましたが、練習を頑張って成長した姿を見てもらいたいです」。また、今年初めて参加する佐々木芽奈（めいな）さん（赤間西小5年）は「昨年の公演を見て応募しました。大勢の人の前で歌ったり踊ったりするのは初めてだけど、仲間と一緒に頑張りたいです」と意気込みを話してくれました。

世界遺産を目指すには、学術的な取り組みと地元の盛り上がりが不可欠です。平成12年に世界遺産に登録された「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産・勝連城がある沖縄県うるま市では、平成11年から現代版組踊り「肝高の阿麻和利（きむたかのあまわり）」を上演し、世界遺産運動を盛り上げました。沖縄版のミュージカルともいえるこの舞台は、10年以上経過した現在でも続き、全国各地で公演を成功させています。

「むなかた三女神記」の関係者も、ゆくゆくは宗像市内だけでなく市外や県外でも上演するという夢を持っています。このような活動を通じて宗像の名前や歴史・文化が全国に広がっていけば、本遺産の世界遺産登録活動に大きな弾みとなることでしょう。

市民参加型ミュージカル「むなかた三女神記」

●日時 9月24日（土）午前と午後の2回公演を予定

●場所 宗像ユリックス・イベントホール

●入場料

▽大人＝1000円（当日1100円）

▽中学生以下＝500円（当日600円）

*チケットは8月初旬から発売の予定



オーディションの様子



本番に向けて意気込みを語る堀さん（左）
と佐々木さん（右）

世界遺産への道32 《平泉と小笠原諸島は… 世界遺産委員会の結果》

2011年08月15日

フランスのパリで6月19日～同29日、第35回ユネスコ世界遺産委員会が開催されました。今回の委員会では、25件が新たに世界遺産に登録されました(表1)。これで、世界遺産の数は936件(文化遺産725件、自然遺産183件、複合遺産28件)となりました。結果からも、登録件数を抑制する傾向は続いていることがうかがえます。

今回、日本からは「平泉／仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群(文化遺産／岩手県)と、「小笠原諸島(自然遺産／東京都)の2件が世界遺産への登録が決定しました。

平泉は暫定リスト記載から10年、2度目の挑戦での世界遺産登録となりました。3年前の委員会で登録延期の裁定を受けてからは、コンセプトと構成資産を練り直し、今回の登録に結び付けました。関係者の努力はたいへんなものだったと聞いています。

さて、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が暫定リストに記載されて2年以上経過しました。現在、全体のコンセプトと構成資産を確定するために、さまざまな角度から研究を続けています。

沖ノ島以外の「関連遺産群」は、専門家の意見を聞きながら、その価値付けを検討しています。

宗像大社(史跡名は宗像神社境内)は古代から続く信仰の観点から、古墳や遺跡は沖ノ島祭祀(さいし)をつかさどった豪族の存在を証明する考古学的観点から、それぞれの価値を説明しようとしています。

本遺産は、近く構成資産を決定し、世界遺産へのさらなる一步を踏み出します。決定の際には、広報紙などでお知らせします。



中尊寺と共に平泉を代表する毛越寺(もうつうじ)庭園

(表1) 新たに登録された世界遺産(仮の日本語訳、正式名称は英語)

文化遺産／21件

- 北シリアの古代村落群(シリア)
- モンゴル・アルタイ山脈の岩絵群(モンゴル)
- 杭州・西湖の文化的景観(中国)
- 平泉／仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群(日本)
- 胡朝の城塞(ベトナム)
- アル・アインの文化的遺跡群(アラブ首長国連邦)
- エディルネのセリミエ・モスク関連施設(トルコ)
- ペルシャ庭園(イラン)
- ブコヴィナとダルマティアの都市住居群(ウクライナ)
- コースとセヴェンヌ、地中海の農耕・牧畜の文化的景観(フランス)
- アルフェルトのファグス工場(ドイツ)

イタリア・ランゴバルド王国の繁栄の地／紀元 568 年～774 年（イタリア）

セラ・デ・トラムンタナ山脈の文化的景観（スペイン）

アルプス周辺の先史時代の湖上住居遺跡群（オーストリア他 6 カ国）

レオン大聖堂（ニカラグア）

サルーム・デルタ（セネガル）

メロエ島の考古遺跡群（スーダン）

モンバサのフォート・ジーザス（ケニア）

コンソの文化的景観（エチオピア）

歴史都市ブリッジタウンとその要塞（バルバドス）

コロンビアのコーヒー生産の文化的景観（コロンビア）

自然遺産／3 件

小笠原諸島（日本）

ケニアのグレート・リフト・バレーの湖群（ケニア）

ニンガルー海岸（オーストラリア）

複合遺産／1 件

ワディラムの保護領域（ヨルダン）

世界遺産への道33 《毎年9月はオガチマンス》

2011年09月15日

「宗像・沖ノ島世界遺産市民の会」が発足してもうすぐ1年。これからの世界遺産登録に向けて、市民の目線での推進を図っています。

活動は大きく2つのグループに分かれて取り組んでいます。1つ目は「保存管理ワーキング」です。世界遺産を目指すまちとして、宗像の歴史や自然を生かしたまちづくりをどのように進めていくかを議論しています。

世界遺産は、個々の資産だけが守られていればいいというものではなく、資産の周辺も景観などに配慮した歴史的なまちづくりを推進していく必要があります。これには、資産周辺に住んでいる人々にも協力してもらいながら、宗像のより良い環境を保っていくことが必要です。

また、無秩序な乱開発を防止し、本来持っている宗像の良さを引き出し、誇りの持てる住環境となるように議論を重ねていきます。

2つ目は「啓発・イベント・観光ワーキング」です。暫定リストに記載された「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の価値やその内容は、まだまだ認知度が低いようです。

そこで、多くの市民のみなさんに世界遺産登録活動を理解して応援してもらうために、毎年9月を「むなかた世界遺産月間（オガチマンス）」として、いろいろなイベントを企画しています。

これが、10月1日から同3日にかけて実施される「宗像大社秋季大祭」に向けての助走となります。ちなみにオガチとは、沖ノ島に10万羽以上生息するといわれている市の鳥「オオミズナギドリ」のことです。

9月24日（土）には、宗像ユリックスで市民参加型ミュージカル「むなかた三女神記」を公演します（1回目午前11時 3回目午後3時）。子どもたちが演じる素晴らしい舞台を見に来てください。



10月1日の「みあれ祭」から秋季大祭が始まります

世界遺産への道34 《沖ノ島と類似する信仰形態「大神神社」》

2011年10月15日

大神神社は、奈良県桜井市、奈良盆地の南東側にある標高467メートルの三輪山をご神体とする神社です。奈良盆地の平野部から三輪山を望むと円すい形を呈し、いかにも神が降臨しそうな威容を醸し出しています。

この神社は、三輪山をご神体としているため本殿がなく、拝殿と山が一体となって構成されています。海か山かの違いはあるものの、宗像大社（史跡名は宗像神社境内）とよく似た信仰形態を持っています。

三輪山のふもとには辺津磐座（へつのいわくら）、中腹には中津磐座、頂上には奥津磐座の祭祀（さいし）場があり、いずれも花崗岩（かこうがん）の巨岩群を祭っています。もともと「津」というのは、港や船着場を意味する字であるとすれば、宗像大社の辺津宮、中津宮、沖津宮の表記が先に付けられたようにも考えられます。

また、大神神社拝殿の裏側は禁足地（入ってはいけない場所）で、そこには山ノ神遺跡や禁足地遺跡などの遺跡群があり、子持勾玉（こもちまがたま）などが出土しました。沖ノ島などの祭祀遺跡の規模に比べると小規模なものです。古代の祭祀遺跡があるという点は共通しています。

大神神社の境内摂社である狭井（さい）神社に許可をもらって三輪山に登ることができますが、「山中での撮影禁止」「一木一葉たりとも、おのを入れてはいけない」「3時間以内に下山する」などの約束事があります。このことは、沖ノ島の禁忌をほうふつとさせるなど、類似する大神神社の信仰形態は、宗像大社の価値を探る上で重要な資料です。

最後に、狭井神社境内にある池の中島には、水神として市杵島（いちきしま）姫神社が鎮座しています。

1



大神神社のご神体・三輪山



狭井神社境内にある市杵島姫神社

世界遺産への道35 《みあれ祭で復活 30年ぶりに陸上神幸》

2011年11月15日

宗像三女神が再会する神事「みあれ祭」

市を代表する祭り「みあれ祭」が10月1日、大島と神湊間の海上で開かれました。今年は、陸上神幸（徒歩行列）が約30年ぶりに復活。伝統の祭りをさらに盛り上げました。

みあれ祭は、宗像三女神である沖津宮（沖ノ島）の田心（たごり）姫神と中津宮（大島）の湊津（たぎつ）姫神が、辺津宮（田島）の市杵島（いちきしま）姫神と再会する神事です。

「みあれ」は「御生れ」とも書き、新しく再生された神の靈力を授かることを意味します。元は、中世の「御長手（みながて）神事」と呼ばれた神迎いの神事を昭和37年に再興したもので、再興後、昭和55年ごろまでは、神湊と辺津宮間の一部で陸上神幸を実施していたそうです。

しかし、後継者不足などを理由に途絶えてしまい、自動車行列へと変更されていました。

今年は、かつての陸上神幸を復活させようと、神湊と田島の両地区のコミュニティ運営協議会などが実行委員会を立ち上げ、陸上神幸を実現させました。



約150隻の船団が海上をパレードした「みあれ祭」

地元の伝統文化継続が登録への弾みに

復活初年の今年は「試行」という形で、神湊の頓宮（とんぐう）から神湊郵便局までの約1・2キロと、辺津宮鳥居から本殿までの2区間を行進。神官を先頭に、宗像三女神のみこし3基と共に、きらびやかな緑色の肩衣（かたぎぬ）と紫色のはかまの狩衣（かりぎぬ）を身にまとった市内の小学生20人ら総勢60人が、神湊のまちを30分かけて歩き、祭りを盛り上げました。

沿道で陸上神幸を見学した長島信子さん（64歳）は「30年ぶりの陸上神幸に感激しました。昔は行列の人数も多く、全員大人でした。やはり、目の前をみこしが通るとありがたみが違う。今後も続けてほしい」。信子さんの長男の多知（かずとも）さん（40歳）は「神様の行列が通った時に涙が流れました。これからも陸上神幸を継続して、神湊の活気を取り戻してほしい」と話していました。

世界遺産の資産は不動産に限られているため、祭りそのものが世界遺産になることはありません。しかし、古代から続く信仰が地元の伝統文化として継続されているという点は、国内外の専門家にも高く評価されています。

また、10月3日の高宮神奈備祭（かんなびさい）も近年再興され、祭りに花を添えています。このような動きは、世界遺産登録活動にも大きな弾みになります。

実行委員会では、来年以降も陸上神幸を継続して、世界遺産登録の盛り上がりにつなげていきたいとしています。



みこしを先導する神官と小学生たち

きらびやかな衣装で小学生たちも行進

みあれ祭の陸上神幸には、市内の小学生 20 人も参加。紅白の長い布（旗）を竹ざおに付した御長手（みながて）を持って行進し、30 年ぶりの陸上神幸を盛り上げました。

▽行列の先頭を歩いた、東郷小 6 年の上野ほのかさん

先頭を歩いたので、少し恥ずかしくて緊張しましたが、たくさんの人が見てくれてうれしかったです。

▽玄海東小 6 年の典略（てんりゃく）賢太郎くん、田中一光（いっき）くん、権田礼二くん

地元のお祭りに参加できて一生の記念になりました。歩いていると竹ざおがだんだん重くなってきました。はかまを初めてはいたけれど、風が通りスースーして気持ちが良かったです（笑）。僕たちは 6 年生なので来年は参加できないけれど、これからも続けてほしいです。

▽玄海小 4 年の天野海斗（かいと）くん、小林泰斗（たいと）くん、久保田理斗（まさと）くん

地元の神様のお祭りに参加できて感動しました。旗が風で揺れ、竹ざおが斜めになって重かったけれど、来年も参加したいです。

（市民記者・岩元賢一）



御長手を持って行進する小学生たち

世界遺産への道36 《景観はまちのブランド》

2011年12月15日

平成16年に景観法が成立し、まちの景観について徐々に関心が高まっています。一言で景観といっても、山や海、都会など、いろいろな景観があります。みなさんは、生活している地域の景観についてどのような感想を抱いているのでしょうか。今回は、景観をまちのブランドとして取り組んでいる自治体を紹介します。

大分県中津市では、市全域を景観計画区域に設定し、中津城の城下町の一部（福沢諭吉の旧宅周辺）や耶馬溪などの景勝地を将来に向けてどのようにして景観を保っていくのかというマニュアル（中津市景観計画）を作成。100年後のより良い街並み景観づくりを目指しています。

大分県日田市では、先に小鹿田（おんた）焼集落周辺を景観計画区域として、焼物の里とその上にある棚田の集落を中心に、小鹿田焼の里重要文化的景観として選定しました。現在は、日田市全域が景観計画区域となり、日田市街地の豆田の街並みも伝統的建造物群として重点地区に指定しています。この中にある江戸時代創立の全寮制の私塾・咸宜園（かんぎえん）は、世界遺産の暫定リスト入りを目指しています。

太宰府市では、市全域の15パーセントが大宰府政庁の国指定史跡です。また、太宰府天満宮もあることから、景観をどのように整えていくかについて平成20年から景観計画団体として取り組み、平成23年度から本格的に施行されています。担当者も「景観計画は規制ではなく、住んでいる人がどんなまちにしていきたいのかが大切です」と話していました。

一方、宗像市には、海、山、街、島があり、他の自治体にはない独自の魅力を持っています。本市にふさわしい景観や世界遺産にふさわしい景観、みなさんが心地の良い景観とは何かを考慮し、将来の世代に残したい景観を考えていくことは、今を生きる私たちの責務ではないでしょうか。



大宰府政庁跡と景観

世界遺産への道37 《構成資産決定に向けて白熱した国際専門家会議》

2012年01月15日

第3回「宗像・沖ノ島と関連遺産群」国際専門家会議が昨年11月1日から4日間、市内で開かれました。前半の2日間は、構成資産候補地を視察、後半の2日間は、大きな課題となっている構成資産の決定に向けて白熱した議論が展開されました。

今回の会議には、初参加のクリストファー・ヤングさん（イングリッシュ・ヘリテージ世界遺産国際政策担当責任者）ら国際専門家4人と、西谷正さん（九州歴史資料館館長）ら国内専門家5人に加え、研究をお願いしているさまざまな分野の専門家11人が参加。過去最大級の会議となりました。

議論の焦点は、「本遺産の価値証明」「コンセプト」と「構成資産」の3点でした。信仰や交流など、多角的に本遺産の価値とコンセプトを検討し、世界遺産としてどの資産がふさわしいのかをさまざまな角度から議論しました。

これまでの会議では、「神社や古墳まで含めると価値の証明が難しくなるため、構成資産をできるだけ絞り込むべきだ」という意見が多く出されていました。しかし、今回の会議では、国際専門家を中心に「東アジアとの交流という視点で考えると、祭祀（さいし）をつかさどった宗像氏の存在を証明する古墳も入れることで、沖ノ島の価値がより高まる」などの意見が多く出されました。

また、「保存管理の観点から、周辺が開発の脅威や景観などに配慮が欠けている資産には、さらなる検討の余地がある」との意見も付け加えられました。

今後は、今回の議論を踏まえて構成資産の決定に向けた作業を進めていきます。価値証明はもちろんですが、資産周辺の状況などを考慮しながら、構成資産を絞り込んでいくことになります。



宗像大社中津宮で神官（左端）の説明を聴く専門家のみなさん

世界遺産への道38 《富士山・鎌倉の推薦書を提出》

2012年02月15日

日本では昨年、文化遺産「平泉・仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」と自然遺産「小笠原諸島」が新たに世界遺産に登録され、国内の世界遺産は16件となりました。

今年も新たに、日本から世界遺産登録に挑戦する遺産があります。「富士山」と「武家の古都・鎌倉」です。両遺産とも、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」と同様、既に暫定リストに記載された遺産です。

「富士山」は当初、典型的な円錐（すい）状成層火山として、自然遺産での登録を目指そうとしていました。しかし、世界には同じような火山が他にもたくさんあり、登山者が捨てるごみの問題もあるため、信仰の山として文化遺産登録を目指すことにしました。そして、平成19年1月に暫定リストに記載され、今年、推薦書をユネスコ世界遺産センターへ提出しました。

「武家の古都・鎌倉」は、当初「古都鎌倉の寺院神社ほか」という名称で、既に世界遺産に登録された法隆寺や姫路城と同様、平成4年に暫定リストに記載された案件です。20年後の今年、ようやく推薦書を提出する運びとなりました。

暫定リストに記載され、世界遺産登録のための推薦書提出には、さまざまな準備を整える必要があります。「資産そのものに世界遺産としての価値があるか」「遺産は完全な形で保たれているか」「資産を残すために周辺の環境は問題ないか」など、これら全てがクリアされて初めて推薦書にまとめられ提出されます。その後、世界遺産委員会で審査を受けます。

「富士山」と「武家の古都鎌倉」は、推薦書を基に今年の夏ごろにイコモス（国際記念物遺跡会議）の現地視察を経て、来年の春ごろ、「記載」「情報紹介」「登録延期」「不記載」のいずれかの勧告が下されます。そして、来年夏に開催される世界遺産委員会で、その勧告を踏まえた上で最終的な4段階の結果が下されることになります。

「記載」であれば世界遺産登録決定ですが、「情報紹介」であれば推薦書の書き換え、「登録延期」であれば提案内容のやり直しなどが求められます。平泉は平成20年に「登録延期」となり、再度推薦書を提出して平成23年に世界遺産として登録されました。本遺産も、推薦書の作成に向けて課題を一つずつクリアしていく必要があります。



世界遺産への挑戦が決まった富士山（写真提供：静岡県観光協会）

世界遺産への道39 《国立民俗博物館で展示 沖ノ島祭祀遺跡の模型》

2012年03月15日

千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館を知っていますか。そこには、一つの部屋を使った「沖ノ島展示室」があります。

東京都の京成上野駅から特急で約1時間、千葉県の京成佐倉駅で下車。そこから徒歩15分の場所に国立歴史民俗博物館があります。

中世の山城跡に建つこの博物館へと上る道の途中には、大分県の臼杵石仏の野外レプリカなどがあり、日本を代表する歴史民俗博物館であることを実感させてくれます。

常設展示は、旧石器時代から近現代までの考古・歴史・民俗資料で、時代ごとにフロアがあり、とても幅広い内容となっています。その中に沖ノ島展示室があります。

1981（昭和56）年に開館した国立歴史民俗博物館の初代館長は、歴史学者で東京大学名誉教授の井上光貞さんでした。井上さんは、沖ノ島の調査結果、特に祭祀（さいし）の変遷にとっても強い関心を持ち、この博物館に展示することを決めたそうです。

博物館の展示室に入ると、沖ノ島の祭祀遺跡群の立体模型があります。岩上、岩陰、半岩陰・半露天、露天のそれぞれのボタンを押すと、祭祀遺跡の場所とその年代が表示されます。

また、岩上祭祀17号遺跡の実物大模型は、21面の鏡や鉄器、装身具が出土したままの状態です。

さらに、5号半岩陰・半露天祭祀遺跡も同様に、実物大の祭祀遺跡模型に土器や琴、龍頭が出土した状態を復元しています。沖ノ島の祭祀遺跡についてこれほど忠実に復元展示されている場所は他にありません。

遠く関東の国立歴史民俗博物館に展示されているということは、沖ノ島祭祀遺跡が日本を代表する祭祀遺跡であることを示しています。関東地区の本遺産の発信拠点として、今後もこの展示を活用していきたいと思えます。

次回4月15日号から、コーナーの名称を「宗像・沖ノ島と関連遺産群・ふるさとから世界遺産を！」に変更し、引き続き、世界遺産へ向けた活動などを紹介していきます。



千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館



沖ノ島17号岩上祭祀遺跡の復元模型